九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

野間秀樹著『言語存在論』

辻野, 裕紀
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/7451550

出版情報：言語文化論究. 57, pp.163-166, 2026-10-30. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

書　評
野間秀樹著『言語存在論』[1]

辻　野　裕　紀

SNS の普及により、我々の言語は羸痩（るいそう）した。熟思なきことばの脊髄反射的反復。スタンプのみで事足りてしまうコミュニケーション。フィルターバブルの内側の僻した語彙。書物であっても硬質な文体は嫌厭され、かくして情報さえ等価であれば、書き手は代替可能でアノニマスな存在へと落魄する。〈言語的貧困の時代〉である。

一方、世は〈言語化ブーム〉である。ことばにできることはよいことだ ── そんな風潮も蕃衍している。だが、そこに沈潜するのは「言語は疎通の道具である」「言語化はスキルである」という度し難きドグマである。果たして言語は単なる道具なのか。言語化は本当にスキルの問題に還元可能なのか。〈ことばにする〉とはいかなる営みなのか。そもそも言語とは何なのか ── こうした根源的な問いを不問に付したまま語られる言語化の言説は、ほとんど空虚に見える。

本書『言語存在論』は、〈言語的貧困〉と〈言語化〉の時代を生きる我々を、言語の最も深い原理論へと導き、褐変した旧き言語観を刷新してくれる大著である。

『言語存在論』は2018年、東京大学出版会より上木された[2]。著者は、『ハングルの誕生』『K-POP原論』などにより韓国にもその名が著聞する、言語学者にして美術家の野間秀樹氏。〈言語はいかに在るか〉という問いを出発点に、既存の言語学・言語哲学を完膚なきまで粉砕し、独創的な言語論を打ち立てた本書は、近年の類書の中でも突出して刺戟的なものと言ってよいだろう。一見晦渋な内容も散見されるが、著者の深大な学殖と非凡な筆勢に震駭しつつ丁寧に読み開いていくことで、言語学に明るくない読者も過たず了知に達せられるテクストとなっている。ただし、膨大な後註を含め、領域横断的な博引旁証を追尾するだけの知的膂力と感性の柔軟性が要求されることも付け加えておかねばならない。

以下、本書全体の基調となる重要な視点を３つほど私なりのワーディングでパラフレーズしつつ摘記する。これらを事前に把握しておくことで、本書の思路への接岸がいささかなりとも容易になるであろう。

(1)〈言語〉と〈言語のようなもの〉の切り分け

本書はその書名にもなっている〈言語存在論〉という領野を「〈言語がいかに在るか〉を問う思考である」と明快に定義する（p.1）。言語がいかに在るか ── この問いに分け入るためには、何よりもまず〈言語〉を〈言語のようなもの〉から切り分けねばならない。

例えば、伝統的に〈内言〉〈内的言語〉などと称呼されてきたものは「言語学の最初の対象ではな

い」と著者は宣言する（p.3）。言語学が対象とすべきは〈すでに発せられたことば〉であって、いわば「ことばの胎児」── 本書の用語では〈言語未生以前〉のもの ── はひとまず論の外に措くべきだと言うのである。我々は、言語が人間の思考や認識とあまりにも分かちがたく結びついているために、図らずもそれらを綯い交ぜにして論じてしまいがちだ。しかしそれは混乱の温床であり、〈形を纏った言語〉と〈形を纏っていない言語のようなもの〉を潔癖なほどに区別しておくことは、言語を存在論的に観照するための第一の足掛かりとなる。そして、この前提は自ずと20世紀言語学が主たる研究対象としてきた脳内に伏在することば ──〈ラング〉（フェルディナン・ド・ソシュール）や〈言語能力〉（ノーム・チョムスキー）など ── に対する批判的検討へと繋がっていく。学問とは一般に具体のカオスを抽象化する営為であり、従来の言語学も個別具体性の捨象と観念化をその中心的な仕事としてきたが、本書はかかる志向性について、その有効性を認めつつも、〈言語の形而上学〉として仮借なく断罪するのである。

〈言語外現実〉と〈言語内のシステム〉、そして〈言語的対象世界〉という３つのレイヤーも厳然と区分される。〈言語的対象世界〉とは「言語によって意味の中に産出された」世界であり（p.317）、この三者も混和されやすいが、本書を繙くと、これらを甄別（けんべつ）することで開けてくる視界の広さに驚かされる。主に真偽論や時制論、命名論に関わる事柄であり、第７章で仔細に叙されている。

(2) 言語場と人間の現前、そして意味

著者は言語が実際に行われる場を〈言語場〉と呼び、〈誰が誰に向かって、いかなる場で語るのか〉を執拗に問わんとする（p.19, p.23）。何となれば、言語は人間の存在によって現勢化するものであり、また言語的な意味は言語自体に予め実装されているのではなく、言語場的条件に従って密度の異なる**複数**の姿で立ち現れるからである。受話者の現前が言語を言語たらしめ、その意味は発話者のみならず、受話者によっても造形される。そして、異他的な受話者が発話者と全く同一の意味を紡ぐことは通常あり得ない。ことばにはその背後に個人史が棲んでいることを顧慮すれば[3]、こうした事実は瞬時に首肯しうるが、これまでの言語学は、言語があたかも固定的な意味を蔵するかのような錯覚にしばしば陥ってきた。そういった誤認のもとでこそ、ソシュールの〈能記／所記〉という図式も、ロマン・ヤコブソンの〈コード〉も、ジョン・サールの言語行為論も、時枝誠記の言語過程説も成立する。

本書で開陳される如上の賢慮は、〈ことばは意味を持たない。それは意味と〈なる〉のである〉（p.103）との言明に凝縮されているが、畢竟するに、意味とは常に他者に開かれた多孔的な有機物であって、予見不能な偶然性に左右されつつ様々なレベルで顕現したりしなかったりするということである。惟（おもんみ）れば、これは一切のものを無自性（むじしょう）と目する禅の言語観とも相通ずるように思われる[4]。このように、本書は言語場論を拠り所に〈意味同一性〉の神話を実証的に解体しようとしている。意味をめぐっては、第３章を中心に詳論される。

併せて、言語場論の観点から、〈文〉を基本単位とする言語学に対しても手厳しい批判が加えられ、言語学徒が銘肝したい所見がいくつも見える。発話や文といった主題は、第５章にて考説されている。

(3)〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉

言語存在論においては、〈話されたことば〉と〈話しことば〉、〈書かれたことば〉と〈書きことば〉を峻別する。おのおの前者は〈言語の存在様式〉、後者は〈文体〉＝〈言語の表現様式〉に属する概念だが、従前の言語研究はこれらを「しばしば混同してきた」と言う（p.47）。

同時に、〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の違いも一再ならず力説される。著者は、両者を〈テクスト〉という名のもとに粗笨に括るような、ポストモダン的な人文思想の立場は決してとらない。〈書かれたことば〉は、〈話されたことば〉に随伴するプロソディを欠いており、また〈話されたことば〉が本態的に有する不可逆性＝線条性も体感的には失われているからである。これはまさに〈言語がいかに在るか〉という存在論的な問題意識なくしては浮かび上がってこない巨大なる差異と言ってよい。そして、著者は〈書かれたことば〉は〈話されたことば〉の「単なる写し」ではなく、両者は「全く位相が異なった鏡像関係にある」と道破する（p.52）。かような〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の異なりは、〈いま・ここ〉／〈常に・まだ〉、他律の時間／自律の時間などといった時空的な相違にも現れていて（pp.126-136）、著者の鋭利な思索は際限なく拡がっていく。〈書かれたことば〉＝〈テクスト〉についての独自の引用論も興味深く、頁を繰るたびに瞠視してしまう（pp.164-173）。

〈書かれたことば〉の身体たる文字についての考察も詳しい。滅ぼされた文字としての西夏文字（pp.82-84）や遡及不能な文字としてのグルジア文字（p.88）の紹介から、訓民正音の創制原理とその背景についての長大なる論究（pp.55-94）、権力の意匠としての〈文字の排他的所有〉（pp.53-54）や価値付与された〈書の私的所有〉（pp.124-125）などといった社会言語学的洞察に至るまで、刮目すべき知見が随所に光っている。漢字からアルファベットにまで拡張された〈形音義トライアングル〉といった創見も注目される（pp.136-164）。

〈書かれたことば〉をめぐる考究は、紙に記されたアナログ・テクストにとどまらない。インターネット時代における〈書かれたことば〉の激変や、〈話されたことば〉と〈書かれたことば〉の相互浸透、著者の造語である〈TAVnet 資本〉、さらには AI などについての卓見は本書の真骨頂である。

こうした問題はおよそ第２章と第４章において論ぜられている。

上来の約言で分明なように、本書は言語学や哲学をはじめとする、ありとあらゆる人文学の思潮を縦横無尽に駆け巡りつつ、〈言語はいかに在るか〉という問いを見事に問いきっていると言えよう。諸々の概念を截然と区別した上で、二値的な離散性よりも多元的な連続性を重視する立場から言語や意味を可変的な動的存在として見据えることで、新たなる知の地平を鮮やかに切り開いている。この犀利な思考を学究はいかに解釈し、発展させていくべきか。「理系化」しつつある言語学の抗しがたい流れの中で、人文学的学知に基礎づけられた言語存在論の意義はいよいよ強調されねばならない。言語教育への示唆にも富んでいる。著者の渾身の問いを承けて、まだ始動したばかりの言語存在論的な談論が斯界に澎湃（ほうはい）として湧きいずることを期待したい。

最後に、本書を巨視的な言語思想史の中に定位せんとするとき、その著者が日本語を母語とする韓国語研究者であるという点も特記すべきである。言語存在論は、汗牛充棟の西洋言語思想の祖述にとどまらず、東アジアの言語や言語思想を存分に組み入れることによって学術的一般性を獲得し、より精緻な段階にまで練り上げられていると断じてよい。これは著者の言う〈間言語的煩悶〉にも関わる論件であり、間言語的煩悶を超克するには可能な限り多くの言語を学ぶほかないのだろうが、

本書の著者は幸いにしてそうした悩乱とは無縁である。例えば、第６章で説示される〈主述論・省略論〉は、主語を必須要素としない単肢言語たる日本語や韓国語がその着想の淵源であり、また第２章や第４章で展開される圧巻の文字論は、著者がヨーロッパ語にも通暁し、かつハングルや仮名、漢字などを「ふだん使い」の文字とする極東の言語学者だからこそ可能となったものである。哲学研究の界隈でも近来、西洋中心の哲学を根本から組み替えようとする〈世界哲学〉が大きな潮流を形成しているが[5]、日本語圏・韓国語圏から現れたこの新しき言語論も、西洋発祥の言語学や言語哲学の書き換えを強く迫るものであり、向後、本書が他の言語圏においても翻訳され、玩読されることを心より所望する次第である。

注

1　本稿は『言語存在論』（野間秀樹著、東京大学出版会、2018年）の韓国語訳『언어존재론』(노마 히데키 지음, 김경원 옮김, 연립서가, 2026년）に付された筆者（辻野）の解説「『언어존재론』에 부치는 말」の日本語原文「『言語存在論』によせて」に若干の修正を加えたものである。

2　〈言語存在論〉と銘打った論攷は、「言語存在論試考序説ⅠⅡ」（野間秀樹編著『韓国語教育論講座 第４巻』、くろしお出版、2008年）をその嚆矢とする。2021年には『言語存在論』のいわば「実践論」として、『言語 この希望に満ちたもの：TAVnet時代を生きる』（北海道大学出版会）が編まれた。日本語が読める読者諸兄姉は同書も併せて読まれることを勧める。本書の内容をより立体的に理解できるであろう。

3　辻野裕紀（2023）「〈愛の言語論〉序説」『言語科学』58、九州大学大学院言語文化研究院言語研究会、p.22.

4　井筒俊彦（1991）『意識と本質：精神的東洋を索めて』、岩波書店、p.361.

5　例えば、筑摩書房から『世界哲学史』シリーズ全８巻＋別冊（伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留責任編集）が2020年に刊行された。2024年には版元を同じくして『世界哲学のすすめ』（納富信留著）、『アフリカ哲学全史』（河野哲也著）が発刊され、一部の読書人の間で話頭にのぼった。